

女性自然科学者育成に貢献された故林太郎先生の小冊子『湖南の春』—東京女子高等師範学校からお茶の水女子大学へ移行期の化学科と短歌—

第二次世界大戦後の昭和24年(1949年)お茶の水女子大学は、戦前の東京女子高等師範学校から新制大学として新たなスタートをしました。故林太郎先生(お茶の水女子大学の在職期間:昭和2年~43年)は戦争中従軍されていた一時期(昭和19年~21年)を除き、戦前、戦後を通じて黒田チカ先生(明治42年~昭和27年)、先生の教え子でもある阿武喜美子先生(昭和16年~50年)とともに化学科の教授として、教育と研究に携われました。いわば現在の化学科の基礎を作られた先生方のお一人です。恵まれない研究環境の中で、有機溶媒中で或る化学種が光照射により、可逆的に色に変化する現象(フォトクロミズム)を故前田候子先生(昭和32年~平成8年)とともに世界で初めて見いだされ、その機構を明らかにした業績により第16回日本化学会賞(昭和38年度)を受賞されました。(詳しい研究内容は桜化会 OUCA のHPの前田先生の投稿をお読み下さい。)

ご遺言により、遺産を銀行に委託され、公益信託林女性自然科学者研究助成基金として昭和58年度から平成24年度の30年余りにわたり女性研究者が支援されてきました。そのことは「女性自然科学者の明日を夢見て—あゆみ—」として編集され、設定趣意書に林太郎先生の思いが書かれております\*。また、お茶の水女子大学前学長・名誉教授室伏きみ子先生が、日本化学会誌「化学と工業」令和5年(2023年)8月号巻頭言で「女性自然科学者育成への思い:故林太郎先生のお心に支えられて」としてこの助成金により640名の方が励まされたことを詳しく紹介されております。

林先生の戦前からの同僚であられた黒田チカ先生については日本で最初の女性の理学博士としてお茶の水女子大学のHPや桜化会 OUCA のHPだけでなく東北大学のHPでも紹介されております。一方、戦前は黒田先生と共に化学教室を支えられ、戦後は大学の化学教室を中心になってたちあげられた林先生のことについて今となっては知る人が少なくなってしまうことには寂しさを覚えます。ここで先生のお書きになられた『湖南の春』のご紹介を通じて皆様にご紹介して先生についてお伝え出来たらと思います。

先生は定年後『湖南の春』という小冊子(お茶大の図書室にあります)を著わされ、卒業生や関係者に配布されました。この冊子は三部に分かれ、第一部は『湖南の春』と題され、中国湘南省の各地、漢口、上海にて従軍中に作歌された300首のうち200首、第二部は『柳絮』と題され、短歌を詠んだ湖南の各地での先生の従軍生活や漢口での燃料油などの製造実験など、また終戦後上海から乗船、浦賀に到着し帰国されるまで、更に中国人への慙愧の念、ご家族への思い、戦争への思いなどを綴られました。第三部は『四十年』と題され、先生が大正14年(1925年)東京大学理学部化学科を卒業されて以降定年までの研究生生活で会われた先生、学生について述べられたものです。なおここで柳絮というのは、綿のような毛のついた白い軽い楊柳の種子で、漢口で、昭和20年4月11日と昭和21年4月17日柳絮が突然柳の高い梢から雪の降るようになどから音もなく舞い落ちるのをご覧になって感銘をうけられたことから、第二部の題名とされたそうです。定年を記念する冊子は、通常ご自身の研究生生活についてお書きになるものですが、先生は戦

争に従軍されたご経験を第一部、第二部に著わしておられます。先生の平和への祈念と  
思います。先生の短歌の中の幾首かをここにご紹介させていただきます\*\*。

第三部の『四十年』の部分を概略すると、先生はまず、ご自分の研究生生活は戦前と戦後  
の二つに分けられると言われております。東京大学理学部化学科をご卒業後理化学研究所  
に研究生として入所され、高圧触媒反応の研究に従事されました。理研時代に志願兵とし  
て1年間習志野で、また見習い士官として4か月津田沼で勤務されました。女高師に奉職  
されたのは昭和2年(1927年)10月で11月19日に初めて講義をされたとのこと。着任当  
時の女高師は現在東京医科歯科大学の建っている御茶ノ水にあり、化学教室は関東大震  
災で崩れたレンガ建て本館のあとに建てられた木造平屋建てのバラックだったそうで  
す。昭和7年に現在地の大塚に移転しましたが、化学科は教授2名、助手2名、生徒32  
名の計画のもとに設計施工されたもので、いかにも手狭でした。着任当時、化学科は平  
田敏雄教授、黒田チカ教授、吉村花子助手の3名で、平田教授が病没され林先生が教授に  
なられました。この体制が昭和16、7年ごろまで続き、その後定員増により阿武喜美子先  
生(生物化学)、吉田武子先生(無機化学、~昭和32年)が加わりました。先生の昭和19  
年から昭和21年にわたる従軍期間中も、生徒は勤労奉仕があり、残った先生方で地方に  
疎開して教育は続けられました。女高師は教育が主で、実験設備も貧弱でした。そのた  
め、先生方は講義が終わると駒込にある理化学研究所で実験をされました。理学の学  
生は全部で30名、2年までは今でいう一般教養を学び、3年時に物理、数学、化学、動物、  
植物専修に分かれ、化学の生徒数は年により2~6名だったそうです。先生は有機化学ば  
かりでなく、無機化学や物理化学を教えられたそうです。また家事科(のちの家政科)で  
も化学を講じられたそうです。昭和24年の学制改革により、女高師はお茶の水女子大  
学と名称を変え、大学として新たにスタートを切りました。戦前からの黒田チカ先生、  
阿武喜美子先生、吉田武子先生、林太郎先生に加えて 中西正城(昭和24年~61年)(分  
析化学)、立花太郎(昭和25年~55年)(物理化学)、塩田三千夫(昭和26年~61年)  
(有機化学)、岡嶋正枝(昭和31年~53年)(一般化学)、和田昭充(昭和31年~38  
年)(生物物理化学)、内海誓一郎(昭和32年~42年)(無機化学)諸先生などが新た  
に加われ、林先生の退官時には最終的に教員定員13名となりました。

講義を受けただけの学生でさえも、先生の穏やかなお人柄、講義で模擬実験をされ  
るときの鮮やかな手さばきと、とても楽しそうな様子などに感銘を受けることが多  
かったそうです。先生は理学部本館ができ研究設備も整い本格的に研究がなされる  
ようになったことに深い喜びを持っておられること、化学科出身で、お茶の水女  
子大学関係で仕事をしている方と、最後の学部卒業生、修士課程修了者の名前を  
あげられ、彼女らの今後の活躍を祈って『湖南の春』の筆をおかれています。

なお化学科は先生のご定年間近の昭和39年に大学院修士課程、昭和52年に博士課程が  
設置され、現在に至っています。

第2代会長 梅澤香代子

第3代会長 今野美智子

\*

## 設定趣意書

設定者・林 太郎は、昭和2年以来、東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学、東京家政学院大学及び理化学研究所において化学の教育と研究に携ってきた体験から、わが国の自然科学の基礎的分野の女性研究者の研究環境が必ずしも恵まれていないことを痛感してきた。

退官後も、何らかの方法で女性研究者の研究援助を行いたいと考えてきたが、今般、自然科学の女性研究者に研究資金を援助し、いささかなりとも研究環境の改善に役立つことを願って、本公益信託の設定を企画したものである。

設定者が助成対象者を女性研究者に限定して本公益信託を企画した動機は、設定者が多年、教育と研究に専念することができ、かつ、本公益信託の設定企画が可能となったことに対する亡妻の50年を超える協力への感謝の私情からである。

また、基金が少額であるので、重点的助成を考慮し、自然科学のうち、特に設定者の専門分野であり、かつ、ますます重要な研究分野となっている化学の基礎的分野の研究に携っている女性研究者の助成を中心に運営することを考えている。

これによって、自然科学の女性研究者の研究環境改善に資し、女性研究者を励まし、勇気づけ、自然科学の基礎的研究における人的裾野を拡大して、以て学術の進展に寄与することを願っている。

昭和58年1月12日

設定者 林 太郎

(「女性自然科学者の明日を夢見て—あゆみ—」から)

\*\*

林先生が従軍中に詠まれた短歌 『湖南の春』から

大海をわたりゆくらむ国はらをおもふ朝なり草に雨ふる  
(昭和十九年五月 津田沼にて)

霧こむる大江の夜に国さかひ守れる兵のひとり見えたり  
(鴨緑江をわたり満州に入る)

あかつきにわかれてゆきし年老ひし少尉まひるに死にて帰れる

岩塩の小さき粒を掌にのせて味ひにけり一粒一粒

人去りし湖南の村の空家に康熙辞典は捨ててありたり

あたたかき春のものうきまひるまを天つちこめて柳絮ふりくる

一もとの冷却管をいたはりて油つくりにもいそしむ

銀色の星二つある襟しるし浦賀の海にこの朝捨てぬ

(昭和二十一年七月十三日晴、浦賀上陸)